

大津絵と風刺精神

日本のパロディーはレベルが高かった

「大津絵」といって、もう知る人は多くないだろう。江戸時代、近江国(滋賀県)あたりの東海道で、お土産に安く売られた肉筆の絵である。安いから捨てられ、後世には残らない。多く見積もって、全国の美術館に300ほどしかない。

クリストフ・マルケさん(50)は大津絵に魅せられて研究を続け、おそらく国外で初めて、大津絵を紹介する本をフランスで4月に出版する。面白さは、絵に込められた日本人の風刺、パロディーの精神だという。

「名もない絵描きが時間をかけずに描く大津絵には、いくつが代表的な画題が決まっています。中身は時代によって変わりましたが、初期は安手の仏画でした。時代が下ると、だんだん俗っぽくなり、風刺や教訓の要素が強まっています。もちろん、土産だから人を喜ばせて売れなくちゃならない。そこが大津絵の独特のところです」

「たとえば、鬼が法衣を着て念仏を唱えている。『鬼の念仏』という18世紀ごろの代表的な画題ですが、見た目はお坊さんでも心は鬼のようだ、という風刺

Christophe Marquet 1965年仏リール市生まれ。リール第3大学で西洋美術史などを学ぶ。東京大学に留学。明治時代の洋画家・浅井忠の研究で博士号。現在、日仏会館フランス事務所長、仏国立東洋言語文化大学(INALCO)教授。江戸、明治の日本絵画をフランスで紹介し、大津絵の本を今月出版する。

今の日本は遠慮が過ぎる

クリストフ・マルケさんに聞く

なんです。私たちは政治や権力をからかうことが風刺だと考えますが、当時は幕府や藩をからかうのもってのほかです。だから別の形で、人の営みをユーモラスに批判する。今とは違った意味の風刺ですね」

昭和の初め、民芸研究家の柳宗悦が大津絵に新たな価値を見いだした。

「彼は大津絵について、諸説、人間社会への批判、庶民の機知、皮肉がある、と解釈しました。

本来持つユーモアを

「本を指すと

つまり、同じ民画でも絵馬のよさからかうことがなく、『風刺画』で、庶民が社会に対する不平を公表し得た唯一の道だった、と言ったんです。その解釈は正しいと思います。ほかに、大津絵を『平民芸術の先駆』と言った人もいます。なぜそうしたもの

マルケさんがつくった版画集を繰ると、面白いのだが、絵だけ見ても風刺の意味がよく分からない。江戸時代、特にはやった日本独特のユーモアの型が「見立て」だという。

「『鬼の念仏』は人を鬼に見立てました。この『瓢箪絵』は写真左は人を猿に見立てている。瓢箪絵は禅宗の公案(禅問答)からきたもので、人が瓢箪で絵を押さえるように、とらえ

お雇い技術者のドイツ人2人が書いた『日本のユーモア』という本がある。フランス人も1888(明治21)年に『秘蔵の風刺画』と題した本で鳥獣戯画や北斎をとりあげ、日本の長い風刺の伝統を紹介しています。当時はヨーロッパ人も日本人はユーモラスな民族だと思っていたんですよ」

「いまも漫才や落語がそうです。普通の人だっけとちよっとお酒飲めばジョークは豊かですよ、外国人が持つ勤勉でまじめな国というイメージとは裏腹にね。ただ、人を褒めるのはいいけれど批判はダメ、という暗黙のルールがあるのではないかと。戦後民主主義の誤った解釈だと思っ

「大正までの新聞はもっと自由で新聞の歴史は風刺精神、批判精神とともにあるんです。明治に出ていた『團圓珍聞』。新聞じゃなくて珍聞ですよ。漫

画もたくさん使ったときの政府を容赦なく風刺し、検閲に引かかると売れ物になっていました。もちろんまじめな新聞もありましたが、一方でこういった媒体が江戸時代からの風刺やユーモアの伝統を引き継いでいたんですね。そこには大津絵の影響もあったと思うんです」

(編集委員 小林貞太)



「いつからそんなイメージになったんでしょうね。明治には

「もとは、お坊さんが川の鯉を瓢箪でとらえようとしている有名な絵『瓢箪図』があります。それを知らないで、これを見て面白くない。当時も教養が必要だったわけですよ」

外国人と話していると、よく「日本人にはユーモアがない」と言われる。

風刺への攻撃に危機感

「ものが言える」のが健全

東大に留学、そして2011年からは東京・恵比寿で暮らす。日本語も堪能だ。マルケさんが所長を務める日仏会館フランス事務所はフランスの学術や文化を日本に紹介する政府機関。両国の知的な交流の最前線を担う。

やはり気になるのは1月のテロ事件だ。マルケさんは「フランス革命から200年続いてきた風刺の精神に対する攻撃だ」という危機感を持ったという。「風刺新聞には聖職者を絶対視することへの反発や反戦、反汚職の伝統があって、『シャルリエブド』にイスラム教徒を傷つける目的があったわけではない。もちろん風刺画は人を喜ばせるために描くのではなく、あるショックを狙ってはいるんですが」

日本人にはフランスの風刺がどぎつく映る。「もともとあの新聞を読む人はごくわずかしかない。誰もが彼らの主張に賛成したらおかしいですよ。でも、彼らがものを言えるということは、そこに自由があるということですよ。それが健全な社会でしょう」。おそらく、フランス人を代表する意見だろう。

日仏会館のシンポジウムで司会するマルケさん

